

「奥山田町のしだれ桜」小考 —大宝二年持統太上天皇三河行幸との邂逅—

花井 しおり

〈キーワード〉

①大宝二年持統太上天皇三河行幸 ②万葉集 ③持統太上天皇

〈論文要旨〉

岡崎市奥山町には、樹齢1300年とされる、「持統天皇お手植え」伝承をもつ「持統桜」が残る。その桜の樹齢が1300年であるとすれば、『続日本紀』大宝2年(702)に見える、持統太上天皇の三河行幸と関わるものと解される。しかし、『続日本紀』は、持統太上天皇の三河行幸時の動静を欠く。そこで、『万葉集』の大宝2年の三河行幸関係歌等から、「奥山田町のしだれ桜」と持統太上天皇の三河行幸との関連を考察する。

The Progress of the Abdicated Empress Jito to Mikawa

Shiori HANAI

「奥山田町のしだれ桜」小考

―大宝二年持統太上天皇三河行幸との邂逅―

花井しおり

はじめに

岡崎市奥山田町の山腹に、一本のしだれ桜の古木がある。その傍らには、岡崎市教育委員会による次のような記載が見える（傍線花井）。

岡崎市指定文化財
天然記念物 奥山田のしだれ桜 一本

幹周り三・一三メートル、根周り三・二五メートル、樹高一二・五メートル、枝張り東西二十・五メートル、南北二十二・〇メートルに及び樹形は極めて優美である。（樹木計測日 平成二十三年一月十三日）

エドヒガンの枝垂れ品で、三月下旬～四月上旬に葉が出る前に淡紅白色の花を咲かせ、満開時には色が白くなる。幹にはノキシノブなどが着生し、古木のおもむきがある。

一三〇〇年程前、持統天皇の村積山行幸の際のお手植えという伝承がある。

昭和三十八年五月八日指定

岡崎市教育委員会

この桜の樹齢が、一三〇〇年余りである（注一）としたら、右の傍線部のように、持統天皇との結びつきは考えやすい。『続日本紀』には、大宝二年（西暦 七〇二年）の持統太上天皇（注二）の「三河行幸」（注三）記事が見え、万葉集にも題詞にその時の作と明記される歌が収められているから。

この桜を、持統太上天皇の三河行幸に関わる「持統桜」として周知にした契機の一つに、平成十五（二〇〇三）年、一月十日の「朝日新聞」「中日新聞」の朝刊 愛知三河版の記事（注四）が掲げられる。両紙が伝えるように、持統太上天皇お手植えの桜が、取り木・接ぎ木などによって、その桜の子孫が、今に至るまで岡崎の奥山田の地に根付いてきたと解するのである。

今、岡崎の地に語り継がれる持統太上天皇「お手植え」伝承。それを負う桜が毎春花を咲かせ、それが語り継がれているという。本稿では、「奥山田のしだれ桜」と持統太上天皇の三河行幸との出逢い、その由縁について考えてみたい。

第1章 大宝二年持統太上天皇の三河行幸―『続日本紀』

『続日本紀』大宝二年に、持統太上天皇唯一の三河行幸関係記事が載る。『続日本紀』記載の、その三河行幸関連記事を、日付順に次に掲げる（地名の傍線花井）。以下、『続日本紀』の引用は、『新日本古典文学大系 続日本紀』による。

①九月十九日

使を伊賀・伊勢・美濃・尾張・三河の五国に遣して、行宮を营造

せしむ。

②十月三日

諸神を鎮め祭る。参河国に幸せむとしたまふ為なり。

③十月十日

太上天皇、参河国に幸したまふ。諸国をして今年の田租を出だすこと無からしむ。

④十一月十三日

行、尾張国に至りたまふ。尾治連若子麻呂・牛麻呂に姓宿禰を賜ふ。国守従五位下多治比真人水守に封一十戸。

⑤十一月十七日

行、美濃国に至りたまふ。不破郡の大領宮勝木実に外従五位下を授く。国守従五位上石河朝臣子老に封一十戸。

⑥十一月二十二日

行、伊勢国に至りたまふ。守従五位上佐伯宿禰石湯に封一十戸を

賜ふ。

⑦十一月二十四日

行、伊賀国に至りたまふ。行の経過ぐる尾張・美濃・伊勢・伊賀等の国の郡司と百姓とに、位を叙し禄賜ふこと各差有り。

⑧十一月二十五日

車駕、参河より至りたまふ。駕に従へる騎士の調を免ず。

①、大宝二年九月十九日の条は、この時の行幸の行宮の造営記事である。国名の配列から、持統太上天皇の行幸先への行路と推察される。続く②、③の記事からは、この時の行幸先が「三河」と解される。また、⑧の還幸記事からも、そのように解することに支障はない。

そして、④、⑤、⑥、⑦には、太上天皇の道行きが記されるが、その国名の配列からは三河からの帰路の道筋と解するのが妥当である。とすると、この時の三河行幸は、往路および三河国滞在中について、『続日本紀』に記事を欠くことになる（注五）。

一 岡崎教育委員会の直言による。
二 『続日本紀』では、大宝二年当時の持統を「太上天皇」と記載していることから、本稿では以下「持統太上天皇」とする。
三 新日本古典文学大系『続日本紀』は、この時の行幸を「持統太上天皇の東国行幸」とする。しかし、後述のように、

この時の行幸先は参河と解されるので、本稿では「三河行幸」と称する。
四 朝日新聞（二〇〇三年一月一〇日愛知 三河版）には、「このしだれ桜は、約1300年前に持統天皇が植えたという言い伝えがある古木」と見える。

五 新日本文学大系『続日本紀』は、この記事の欠落について、補注（2・一五八）で「統紀が参河國逗留の間の記事を欠くのは不審である」とする。

第2章 大宝二年持統太上天皇の三河行幸——『万葉集』——

この時の大宝二年の持統太上天皇の三河行幸時の作と題詞に記載される歌が、万葉集に、次のようにみえる（注六）。地名のみを原文表記とし、次に掲げる（傍線花井）。

二年壬寅、太上天皇、参河国に幸せる時の歌

引馬野に にはふ榛原 入り乱れ 衣にははせ 旅のしるしに

（卷一・五七）

右の一首、長忌寸奥麻呂

口いづくにか 船泊てすらむ 安礼乃崎 漕ぎ廻み行きし

棚なし小舟（同・五八）

右の一首、高市連黒人

誉謝女王の作る歌

ハ流らふる つま吹く風の 寒き夜に 我が背の君は

ひとりか寝らむ（同・五九）

長皇子の御歌

二宵に逢ひて 朝面なみ 隠にか 日長き妹が 廬りせむかも

（同・六〇）

舍人娘子が従駕して作る歌

ホますらをの さつ矢手挟み 立ち向かひ 射る圓方は

見るにさやけし（同・六一）

題詞の「二年」は、万葉集卷一の配列から、大宝二年のこと。右において、作者名が、イ、口は左注記載、ハ、ニ、ホでは題詞記載というように、作者名の記載方式が異なる。それは、編纂資料の相違によるのであらう（注七）。

作者名が左注に見える、イ「引馬野」、口「安礼乃崎」の地名は、後述するように三河と解される。一方、題詞に作者名が見えるニ「隠」、ホ「圓方」は、三重県と比定されている。

「引馬野」は、近年の諸注釈書にも「所在未詳」とされるが、ほとんど以下のいずれかの地に比定されている。一つは、三河国、現在の愛知県豊川市御津町御馬付近、引馬神社のあたりとする説（注八）。もう一つは、遠江国、現在の静岡県浜松市曳馬町付近とする説（注九）である。

前者については、『日本書紀』の記事記載の地名、および題詞「三河国に幸せる時の歌」との齟齬はない。とはいえ、後者については、比定地が遠江国であること、すなわち前掲のように大宝二年の持統太上天皇の三河行幸関係記事に、「遠江国」の記載がないことが難点である。しかし、夙に、賀茂真淵が『万葉考別記』で、

遠江国敷智郡濱松の驛を、古は引馬の宿といひ、（阿佛尼の記にみゆ）、その城を近比まで引馬の城といひ、城の傍の坂を引馬坂といひ、其坂上をすこしゆけば大野あり、そを古

へは引馬野と云つと所にいひ傳へたり、へ此野今は三方が原と云、さて此度參河國へ幸と有て、遠江の哥有をいふかしむ人あれど、集中には難波へ幸とて河内・和泉の哥もあり、紀には幸伊与温湯宮と有同度に、集には讃岐の哥もあり、其隣國へは次に幸もあり、亦官人の行いたる事も有し故也、今もその如く也、とする。

そして近時、原秀三郎氏（注十）は、持統天皇六年三月からの伊勢行幸時に、志摩国の「阿胡行宮」へ御したことが、『日本書紀』同年五月六日の条により知られることから、真淵と同様に行幸先を「足場に周辺に足を運ぶことは通例であつたみてよい」として、遠江国説を支持された。

しかし、持統天皇六年の伊勢行幸においては、経由地として「志摩」の地名が『日本書紀』に記載（三月十七日、三月十九日の条）されている。それに対して、持統天皇の三河行幸においては、先掲のように「遠江」関連の記事がない。ということから、遠藤慶太氏（注十二）がいわれるように、「遠江」の記載がみえない当該三河行幸と、「志摩」滞在が確認できる持統天皇六年伊勢行幸とを同列に

扱うことはできない。よつて、三河行幸の折の歌に詠まれる「引馬野」は三河国と考えるのが妥当であろう。

第3章 高市黒人の三河関係歌

また、先掲「(大宝)二年壬寅、太上天皇、三河に幸せる時の歌」に歌（先掲口）を残すことから、高市黒人はその行幸に随行したものと目される。黒人には、その他にも卷三「高市連黒人が羈旅の歌八首」中に、三河国の地名を詠む歌が次のように見える。

それらの歌について、大宝二年の持統太上天皇三河行幸時の作とする見方もある（注十二）。そこで、持統太上天皇の三河での動静を、黒人の三河国の地名を詠む歌により、補ってみたい。

ホ桜田へ 鶴鳴きわたる 年魚市潟 潮干にけらし 鶴鳴きわたる (三・二七二)

へ四極山 うち越え見れば 笠縫の 島漕ぎ隠る 棚無し小船 (同・二七二)

六 以下万葉集の引用は、すべて『新編日本古典文学全集 万葉集』による。
七 伊藤博氏『万葉集釈注 一』集英社 一九九五年十一月
八 「引馬野」、「安礼の崎」に関する諸説については、久曾神昇氏「引馬野・安礼乃崎」（『三河地方と古典文学 愛知大学総合郷土研究所研究叢書Ⅳ』名著出版 一九八九年一月）に詳しい。

九 同右
十 原秀三郎氏「古代国家形成期の東海地域と大和王権―持統天皇の伊勢・参河行幸を中心に―」『地域と王権の古代史学』塙書房 二〇〇二年
十一 「持統太上天皇の三河行幸―三河と東国―」『続日本紀研究』第三七五号 二〇〇八年五月
十二 森浩一氏（『萬葉集に歴史を読む』第四章 持統太上天

皇晩年の三河行幸 ちくま学芸文庫 二〇一一年）、および佐藤隆氏（『本道やアユチ潟と知多半島を視野に』『東海の「道」から見た上代文学―東海・東山道を基軸に―』中京大学文化科学研究所 二〇一六年三月）など。

ト妹も我も 一つなれかも 三河なる 二見の道ゆ 別れかねつる

一本に云はく「三河の 二見の道ゆ 別れなば

我が背も我も ひとりかも行かむ」(同・二七六)

ホに詠まれる「桜田」は、『和名抄』尾張国に「愛智郡作良」と見え、現在の名古屋市南区に元桜田町、桜本町、西桜町などの名が残る、名鉄名古屋本線桜駅周辺と比定されている。同じく「年魚市潟」も、「尾張国愛智郡」(和名抄)の海岸の潟をなしていた地域、名古屋市熱田区および南区の西方一帯と比定されている。ホの「桜田」、「年魚市潟」の比定地については、通説に属する。これらの比定地は、古代東海道の完全な推定は困難であるが、その周辺に属するものと解される(注十三)。

続くへの「四極山」は、所在未詳とされる。とはいえ、直前に配列されるホとの連関から尾張周辺に比定する説によるとすれば、『和名抄』に参河国「幡豆郡 磯泊 之波止」とあるのによって、愛知県西尾市幡豆町、吉良町付近と考えられる。

「笠縫の島」も所在未詳だが、少なくとも「四極山」から望み得る島であることは動くまい(注十四)。

トの「二見の道は」、「三河なる二見の道」と詠まれることから、三河の地名であることは動かない。「二見」というその名、および「二見の道ゆ分かれぬる」と詠まれることから、岐路をいうものと解される。ゆえに、愛知県豊川市御油町と同市国府町との境にあり、東海道の本道(南寄り海沿い)と、浜名湖の今切の險を避けるため静岡県との境の本坂峠を越えて浜名湖沿岸を行く姫街道とが分かれる

分岐点を比定する説が穏当であろう。

その地国府町周辺は、行幸時の行宮として推定される三河国府(注十五)に近いことから、持統太上天皇の随行者が訪れる蓋然性は高かったといえる。

これら、高市黒人の大宝二年の三河行幸時の作と解しうる歌に詠み込まれた地名を勘案しても、岡崎市奥山田町とはなお径庭がある。

第4章 大宝二年持統太上天皇の三河行幸と岡崎市奥山田町

『大和町史』(大和町史編さん会 二〇一二年十二月)所引の『岡崎市史矢作史料編』(一九六一年)において、古代東海道は、奈良時代、七世紀初頭白鳳前期に建立とされる北野廃寺付近で矢作川を渡ったと推定されている。これによると、矢作川の渡渉点、大門町と奥山田町との間は直線距離でおよそ五キロメートル余りとさほど遠くはない。

その北野廃寺は西三河最古とされる寺院跡であり、大宝二年当時、四天王寺式伽藍配置の威容誇っていたと見られる。三河行幸時に、持統太上天皇がその寺を訪れたということを考えてみてもよいのではないだろうか。

【付記】

この原稿は、平成二八年六月二四日、岡崎市中央図書館 りぶらにおいて催されました、岡崎市市制施行100周年新世紀岡崎チャレンジ100『家康塾』白熱教室岡崎 岡崎で『万葉集』をよむ」第1回「持統桜と万葉集」に基づくものです。

十三 注十二の佐藤隆氏前掲論文。

十四 「笠縫の島」については、竹尾利夫氏「四極山・笠縫の島」

（『東海の万葉歌』おうふう 二〇〇〇年）に詳しい。

十五 注十二森浩一氏前掲論文、および原秀三郎氏「『万葉集』

から持統上皇三河行幸を読み解く」（『史料から読み解く三河
西尾市岩瀬文庫特別連続講座』笠間書院 二〇一二年三月）。

花井しおり 人間環境大学教授（日本古典文学）